
何よ、文句ある？

りふえいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何よ、文句ある？

【Nコード】

N6305S

【作者名】

りふえいる

【あらすじ】

女子高校生の日宮明里ひのみやあかりは、不可視の昆虫を目の当たりにした。その日を境に、明里は非日常に巻き込まれるが……突然現れた銀髪の青年に手を引かれ、また心も惹かれてゆく。

「何よ、あれ」

丸い月が輝く夜空に、とても大きなものが飛んでいた。
ハエのような目と、トンボのような羽が背中に四枚あって、昆虫
なのか足が六本あって。

触覚と牙のある頭、細長い胴体、伸縮する尻尾。

その全身が紺色の甲殻でまとわれた、不気味な虫が飛翔している。
それが、建設途中のビルへ体当たりをした。

「うわああああああああああっっ」

「な、なんだあ？」

コンクリート片が周囲に散らばる。

虫はそのビルの存在が気に入らないのか。何度も体当たりし、そ
の足で引っかき、旋回してから尻尾をぶついたりしている。

しばらくして、ビル付近に救急車がやってきた。

落下物による重傷者を搬送はんそうしているようだ。

「な、なんで……警察とか、自衛隊とかは来ないのよ」

二階のベランダから惨状を目の当たりにした、ひとりの少女。

日宮明里ひのみやあかりは、パジャマ姿で手すりから身を乗り出し、その虫が彼
方へと立ち去るのを目撃した。

その事件は、翌朝ニュースで報じられた。

『昨日の深夜、建設途中のビルが突然崩落し、近くを歩いていた』

リビングでできたてトーストにイチゴジャムをぬりながら、明里
はテレビを見つめている。

「姉さん」

「何よ、徹じゆてい」

真向かいに座る、明里の弟である徹が声をかけた。

「夜だからよかったよね。あそこ、姉さんの通学路だし」

「そ〜ね〜」

「そ、それだけ？ 危ないとか、そういうのは出てこないの？」

「別にい？ 事故ったら事故ったで、建設会社に高額な慰謝料請求できるじゃない」

徹はあつけに取られていたが、いつもの姉だと知って安堵あんどした。

「ちっ。自分で顔に石ぶつけてさ、救急車で運ばれときゃよかったかなあ」

「そ、それはダメだよ」

「なんでよ？ お金もらえるチャンスを逃したのが、惜しいと思わないの？」

「人としてどうかと思うよっ」

「はあ？ あんた、あたしの美貌うつくしに傷がついたらさ、何とも思わないわけえっ？」

「話がすりかわってるよ」

ふたりが食事するテーブルの上に、ベーコンエッグとミニトマトが盛られた大皿を置く、エプロン姿の女性。

「はいはい。バカなこと言っていないで、さっさと食べて登校なさい」

「お母さん、徹のバカタレが変なこと言うのよ」

「変なのはあんたよ、あ・ん・た」

「ちっ」

明里は箸はしを手に取り、自分の分のベーコンエッグをふたつに切り分けた。それにケチャップをかけて、一口で頬張る。

「まったく、女の子なんだから、もう少し上品に食べなさい」

「ふあ〜い」

「食べながら返事しないのっ」

日宮母はあきれながら、キッチンへと戻った。

「それにしても、変よねえ」

長々と咀嚼そしゃくしながらテレビを見ていた明里は、それを飲み込んで

からつぶやいた。

「姉さんがかい？」

「違うわ。あんた、昨日空にさ、変な虫が飛んでるの見なかった？
真面目なトーンで話す姉がおかしいのか、徹は思わず吹き出した。
「姉さん。いきなり何を言い出すの？」

「いいから。見たの？ 見なかったの？」

「僕は音に驚いて、すぐに窓の外を見たけど……飛行機なんて飛んでなかったよ」

「ちくがう。虫よ、虫。飛行機じゃなくて」

「ええ？ 今日の姉さん、一段とおかしいよね」

「ちっ」

話を通じないと感じた明里は、舌打ちしてトーストにかじりついた。

「おはよ〜」

「うん。おはよう」

学校の教室に入ってあいさつを交わす、明里とその親友、高崎綾子。
たかさぎあ

席に着いて、明里は隣で微笑む綾子にこんな話題を振った。

「昨日さ、建設中のビルが崩落したのよね」

「あ、うん。明里ちゃんの通学路でしょ？ 危なかったよねえ」

「てゆくか、あやつち。昨晚、その付近に変な虫が飛んでるの見なかった？」

「ふえ？ やだあ。どうしたの？ 真剣な顔する明里ちゃんなんて、
久々だよお」

「ちっ」

頬杖をついて、窓の外を眺める明里。

その視線の先には、昨日見た虫が飛んでいた。

「え？ な、また？」

勢いよく椅子から立ち上がった彼女は、綾子の肩を叩いて、空を飛ぶ虫を指差す。

「ほら、ほらっ。あそこに、変な虫が飛んでるでしょう?」

「え? 何も無いじゃない?」

「な、何言ってるのよ。今も、ほら」

「明里ちゃん、どうかしたの?」

「う、うそ。あたしを、ドッキリにかけよつと……」

ホームルーム開始のチャイムが鳴った。

教師が戸を開けて教室に入り、教卓の前に立つ。

「どうした? 日宮」

「せ、先生。空に、変な虫が飛んでいます」

「は? ……何もないじゃないか。どうしたんだ? いつにも増

して変だぞ、日宮」

「ちっ」

あははと、教室が笑いに包まれる。

おとなしく席に着いて、明里は空を飛ぶ昆虫をずっと凝視ぎょうししていた。

放課後。下校途中に。

「明里ちゃん。あれでしょお?」

「そうよ」

綾子と一緒に事件現場にやってきた明里。

警察の方々が現場検証しているのを、報道陣が中継している。

「建設会社は手抜き工事はしていないと説明しておりますが、警察は業務上過失傷害の疑いで捜査を始めています」

リポーターがテレビカメラのほうを向いて、状況を説明していた。

「人が多いね」

「そうだね。近くに公園があるし、そこでちょっと休も」

「あ、う、うん」

真剣な顔つきの明里を見て、綾子は小首を傾げながら、彼女にっ
いていった。

公園内でクレープの出店を見つけた明里。

「すみません。その、フルーツどっさりクレープをふたつください」
「はい」

若い女性の店員に注文をして、明里はスカートのポケットから財
布を取り出す。

「あ、あれえ？ 明里ちゃん、お、おごってくれるの？」

「うん。嫌だった？」

「と、とんでもないっ」

激しく手を振り、信じられないと言いたげな顔をする綾子。

明里は空を見つめていたので、彼女の様子には気づいていなかった。
た。

「ふたつで六百円です」

「あ、はい」

「まいどありがとうございま〜す」

クレープを受け取った明里は、ひとつを綾子に渡して、近くのベ
ンチへと歩いていく。

「あ、ありがとね。明里ちゃん」

「いいよ。いつも、おごってもらってたし」

「あ、あれえ？ 明里ちゃん、今日は熱でもあるのぉ？」

「……………」

無言でそこに腰を下ろし、クレープを頬張る明里。

明里の様子がおかしいと思いつつも、綾子はベンチに座って、
クレープを味わうことにした。

「なんだったんだらう、アレは。げ、幻覚かなあ」

「虫が飛んでるとか、言ってたよねえ」

「うん。どうして、他の皆には見えてないのよ？」

「み、見えないって。ん〜。明里ちゃん、やっぱり疲れてるんじゃないのぉ？」

「そんなこと、ない」

弱々しい声で否定する明里。

クレープを食べながら、ふたりは公園内の細長い円柱の先端にある時計を見上げた。

「え〜つと。三時半、だね」

「うん」

会話が途切れる。

気まずいと思ったのか、綾子は明里にこんなことを訊ねた。たず

「明里ちゃん。その虫って、どういう形してたの？」

「へっ？ そうねえ」

明里は綾子に、その虫の特徴を事細かに説明した。

「ふうん。なんかそれ、ゲームの中にいそうな虫さんだねえ」

「ゲーム？ 確かに、あんな虫なんて……現実にはいたらいで、大発見よね。もし、もし捕まえられたら、ボロもうけできるかも」

「ええ？」

明里が真剣に悩んでいると知って、綾子は逆に驚く。

この質問でボロが出るかと思いきや、明里がボロもうけの策を考え始めたからだ。

「あ、でもお。あたし以外には見えないんだよねえ。それじゃ、金もうけできないっ？」

「ほ、本気なの？」

「捕まえた後で、ペンキぶっかけりゃいいだけか。そうすりゃ、他の連中にも視認できるしね。うひひひひっ」

気持ち悪い笑みを浮かべる明里に、綾子はドン引き ではなく、関心を持った。

「じゃあ、綾子。今日もカラオケ行く？」

「ふえ？ い、いきなりなんでそんな話に〜？」

「だって、見上げてても虫いないし。捕獲作戦を立てるのと、しばらく歌ってなかったし。歌手志望としては、地道に特訓しとかないと、ね」

「明里ちゃん、歌上手だもんね」

「ええ。将来は歌手で、声優もやって、好きなことぜんぶを、仕事にするんだあ」

「わ。明里ちゃん、頑張つて」

拍手して、明里を応援する綾子。

その明里はクレープを完食して、残った紙くずを丸めて、ゴミ箱へ放り投げた。

「うしっ」

うまい具合に入ったので、握り拳を作つてガッツポーズを決める。

「ごちそうさまでしたあ」

綾子もクレープを完食し、ゴミ箱へと歩いて、そこに紙くずを捨てた。

「さて、カラオケいこいこ」

「うん」

ふたり仲良く、近くのカラオケ店へ向かおうとした。

「ん？」

「わ」

目の前に背が高く、身体の線が細い青年がいることに気づき、ふたりは足を止める。

「……………」

腰まである銀髪は風になびき、太陽の光を浴びて、女性さえも嫉妬する艶やかさあでを持っていた。

その顔は髪と右の碧眼へきがん以外が包帯で隠されている。

服装もあちこち穴だらけで、ちらりと見えるのは素肌 ではない、やはり包帯だった。

「変なヤツ」

「あ、明里ちゃん。口に出して言わないのっ」

「はいはい」

「はいは一回っ」

明里を叱りつけながら、綾子はその青年に頭を下げる。

その横を、通り過ぎようとした時。

「待て」

「っ」

青年が、明里の腕をつかんだ。

「な、なにすんのよ！」

「む」

護身のためにと、明里はその手をつかんで青年をにらむ。

「落ち着け」

言いながら、青年は顔の包帯を空いている手で外した。

「わ」

「あ」

綾子と明里は、びっくりして言葉を失った。

青年の顔立ちが、驚くほどキレイだったからだ。

「わお。イケメンみいっけ」

「あ、明里ちゃんっ？」

目を輝かせる明里とは対照的に、綾子は冷静に周りを見渡す。

「す、すみませ　むぐっ」

「綾子。邪魔しちゃダメよ」

人を呼ぼうとした綾子の口を手で塞いだ明里は、青年とにらめっ

こをする。

「ナンパですか？　悪いけど、あたしは軽くもないし安くもないわ

「よ」

「離してやれ」

「それはこっちの台詞」

「そのままだと、窒息するぞ」

「へ？　あ」

その指摘で綾子が危ないと気づいた明里は、手を外して綾子を支える。

青年は明里から手を放して、ふたりのやりとりを傍観していた。

「だ、だいじょぶ？」

「うう。明里ちゃん、本気で殺そうとしたでしょ」

「ち、ちがつ。だって、こいつが……」

青年は肩をすくめて、それから明里の頬に手を添え。

「え？ な んむっ」

その唇を、奪った。

「え、ええ？」

綾子は目を見開いて、ただ呆然ぼうぜんとしていた。

明里も混乱して、何が起きているのか解らないようだ。

青年はおもむろに明里から離れて、ふいと空をあおぎ見た。

「あ、え、え」

頬を赤くして、唇を手で押さえる明里。

「だ、だれか……ち、痴漢が」

綾子は驚きのあまり、声が出ないようだ。

「いるな」

「あ、あ、あんたあつ！ な、何してくれるのよ！」

「それよりも、上を見る」

「はあ？ 何ごまかそうとしてんの？ あんた、この責任は……」

太陽の光が微かだが遮おさられて、明里は上に何かいると察した。

条件反射で空を見上げ、明里はあの巨大な昆虫を発見する。

「あ、えっ？ な、なんでアレが……」

「やはり見えるのか」

「み、見えるも何もっ。あんた、あんたもアレが見えてるのねっ？」

「いいや。気配だけだ」

「はあ？」

明里はキスされたことも忘れ、上空を旋回する虫を凝視する。

「あ、綾子。あんた、上を見てごらん」

「ふえ？ あ、えっと」

青年と明里を交互に見る綾子。

「いいからっ」

明里に促されて、綾子は視線を上に向ける。

「な、何もいないよお？」

「うそおっしやい！ だつてほら、あそこに」

「あ、明里ちゃんっ。上を見たって、雲しかないよ〜？」

綾子は明里の手を取り、この場から逃げ出そうとする。

しかし、明里は昆虫の存在を感じ取っている青年に興味津々だ。

「あんだ、あんだもアレを捕まえようと企んでるのね？」

「生け捕りだと？ 戯^{たわ}けるな。アレを生かしていることではない。殺すまでだ」

「ひっ」

物騒な発言をする青年を見て、綾子は後ずさった。

明里を残してはいけないと、その手を強く握り締める綾子。

「はあ？ 殺しちゃもつたいないでしょ。せつかくの金づるなんだし」

明里は青年の胸ぐらをつかんで、強引に屈ませた。

「歌ってくれないか」

「はあ？ イミフ」

「いいから、歌え」

「命令しないでくれる？」

「頼む。歌ってください」

「やだっ。さつきキスされたし、その慰謝料として数千万　　うっ
ん。数億円用意なさい」

「オレにできることならなんでもする。とにかく、歌ってほしい」

「そ、そう？　お金が用意できるんだつたら、すぐに持ってきなさい。

い。そして、あたし名義の銀行口座に振り込むのよっ。これで示談成立ねっ」

「そんな話はどうでもいい。早く歌わないと、アイツが逃げてしま
う」

「え？　そ、それはやばいわね。あ、あんだ。あいつを生け捕りに
しなさいよ。いいわね？」

「むう。致し方ない。承知した」

「え、ほんと？ じゃあ」

明里は青年から手を放して、すっと立ち上がる。大きく息を吸って、それから。

「ラララララララアア」

発声練習のつもりで、その歌声を披露した。

「ひっ」

綾子は、思わず明里の手を放した。

「な、な、なにあれ」

「え？」

明里は綾子の反応が気になり、尻もちをついた彼女に手を差し伸べる。

「あ、あれ？ あれのことっ？ 明里ちゃんが言っていた虫って…」

…

「え、え？ み、見えるの？ 綾子にも」

「空を飛ぶ大きな昆虫が、どうしていきなりい？」

虫を指差しながら、綾子はちらりと青年を見やる。

「アイツの名はナラフアド。俗にこう言われている。不可視の捕食者、と」

「知らないわよ。そんなのっ」

「だろうな。元々アイツはこの世界に存在しない。次元のほつれから、こちらにやってきたんだ。あまり長いこと放置はできない。それよりも、歌を続けてくれ。アイツの能力を無効化できるのは、その歌があつてこそだ」

淡々と説明する青年にイライラしながらも。

「そ、そう。じゃ、ラララララアア ルルルルルウウ」

明里は歌うことを続けた。

そのナラフアドは急に旋回し、明里のいるほうへ飛んでくる。

「げっ。な、なにっ？」

「慌てるな。お前は、そちらの娘を連れて逃げる。ただし、歌うこ

とを忘れないでくれ」

「ば、バカ言わないでよっ！ あんたひとりでアレを捕まえて、どっかに売りさばくつもりでしょっ？ そうはさせないんだから」

「な、何を勘違い　ぐっ」

明里は綾子の手を引いて、青年の背後に隠れる。

「うわああああああああああっ」

「な、なによあれ？　ば、バケモンがおりてくるぞおおおおおとおっ」

すでに周囲は混沌としていた。

「大体、あんた見た目からして弱っちいじゃない。どうやって、あんなのとやりあうわけ？」

「案ずるな。ふたりの安全は保障する」

「あつたりまえよ。ひとつでもケガしたら、それひとつにつき万の札束だからねっ」

「やれやれ。どうでもいいことだ」

青年はおもむろに走り出し、ふと立ち止まって、黒く輝く両手をアスファルトへと突っ込む。

「はああああああああああああああああっっっ！」

大声を出しながら、青年は地中から巨大な黒剣こくけんを引っこ抜いた。

「んげっ」

「わわわわっ」

明里と綾子は、身の丈以上の黒い大剣を振り回す青年を見て、お口があんぐり。

青年は大剣の刃先をナラファドへ向けて、空高く跳んだ。

バァンッ。

しかし、青年は大剣を放して、アスファルトの上に落ちて転がる。

「え？　な、何がどうしたのよ」

「あ、あの人……血が、出てる」

明里と綾子は、乾いた音がしたほうを見た。

「何をしている。あの虫も撃つんだ！」

この場に駆けつけた警官が、敵と誤認して青年を撃つたのだ。

「ぐ、な、なんだ……っ」

右腕を射られた青年は左手で大剣の柄をつかみ飛び起きて、急降下するナラフアドを迎え撃つ。

「クギヤアアアアアアアアアアッ」

片腕で大剣を深く振り被り、刀身の腹を右足で蹴って、勢いを与えた斬撃でその足をひとつ切断する。

その足は切り離されても、微かに動いている。

「はあ、はあ、く。こ、これでは……」

息を荒げる青年は明里のほうを見て、こっぴど叫んだ。

「逃げるお！ このままでは、勝ち目がない」

「か、勝てないですって？ あんた、何とかしてそいつを倒しなさいよー！」

「で、できることならそうしている」

顔色の悪い青年を見て、明里は警官のほうを向き、指差して声を張り上げた。

「あんたらっ！ あんのクソ虫をどうこうできるあいつを撃つなんて、頭がどうかしてんじゃないの？ 普通、警官が発砲するのはよっぽどのがない限り、やっちゃいけないはずよ。しかも誤射よ誤射。報道陣の皆さまあゝん！ 警官が誤射して、あのイケメン勇者さんを撃ちましたああああああああああああっっ！」

明里の音量に、近くににいる人々は驚いた。

と同時に、ナラフアドの様子がおかしくなる。

「チャンスだ。逃げるなら今しかない」

青年は大剣を肩に担いで、姿勢を低くする。

「聞こえなかったのか？ お前達は逃げる。ナラフアドは、魔力を好物としている」

「だからなに？」

「つまり、狙われているのはお前だ」

「な、なによ……それ」

明里は青年の言わんとすることを理解できず、首を傾げる。

「く」

羽音がして、青年は振り返りながら大剣を前に構える。

剣先を右足で押さえて、ナラファドの突進をのけぞりながらも防いだ。

「さっさと逃げろ」

「はあ？ あんた、さっきあたしらの安全を保障するって言ってたわよね？」

「それは、この場においては無理だ。この状態では、撤回せざるをえない」

「あ、明里ちゃん。あの人の言う通り、逃げたほうがいいよ」

我に返った綾子は、明里の手を引いて逃げようとする。

が、明里はその手を引き返して、歌うことを続行した。

「ラララララアアアア」 ルルルルウウ」 ラルルルル

ラララッ」

ナラファドは上空で旋回し、警官隊のほうへと突っ込んだ。

「ぐわあああああっ」

「う、うぐ……」

体当たりをまともに受けた警官は、重傷を負って倒れている。

「み、見てください。上空に、あのような巨大な虫が飛んでいます。

いったい、どこからやってきたので きゃあっ！」

報道陣に体当たりをしようとしたナラファドを、青年は大剣を盾にして押し返した。

「な、なにをやっている。アイツは、狂乱して危険だ。早く、ここから立ち去れ」

力なく右腕を垂らし、瀕死の状態で善戦する青年。

リポーターは青年の言葉に促されて、すぐにこの場を後にした。

「お前達も、早く退避しろ」

「い〜や〜よ」

「わがママが……すぎる、ぞ」

青年は力尽きて、うつぶせに倒れてしまった。

「え？ ちょ、な、なにしてんのよ」

「明里ちゃん！」

青年に近づこうとした明里を、突き飛ばす綾子。

「あ、ぐっ」

直後、綾子の背中にナラファドの足がかすった。

「な、何すんのよっ。あや……こ？」

転ばされた明里は、後ろを振り向いて絶句した。

綾子が、血を流して倒れていたからだ。

「な、な」

強いショックを受けて、明里は恐ろしさに震えてしまう。

急旋回して眼前に迫るナラファドを見て、その恐怖はより濃くなつた。

「や、らせるものか……あっ」

「クギヤアアアアアアアアアアッ!？」

青年は最後の力を振り絞って、大剣をナラファドへ投じた。

それはナラファドの胴体をかすり、アスファルトに突き刺さる。

「ピギヤアアアアッ」

深手を負ったナラファドは空高く飛翔し、この場から逃げ去ってしまった。

「あ、綾子」

「だ、だいじょうぶだよ。かすり傷だから……」

救急車に担架たんかで運ばれる綾子。

青年もそれで移されてはいるものの、彼には警察官数人が同行している。

その中には青年が使っていた大剣を運ぼうとする者もいるが、あ

まりの重さに、動かすことを諦めたらしい。

代わりに警備を数人置いて、興味本位でそれに近づく者を排除している。

「君も、ケガがあるなら見せなさい」

「ないわ」

「本当かい？」

「しつこいわよ」

救急隊員を見ずに、明里はそう答えた。

「ま……て」

意識を取り戻したらしく、青年が口を開いた。

「な、ど、どうしたのよ？」

驚いて、明里は青年のほうへ駆け寄る。

しかし、複数の警察官がそれを阻止した。

「じゃ、邪魔よ」

それでも、彼らはどごうとはしない。

「そのままでもいい。聞け」

「う、うん」

「あの虫、ナラフアドは魔力を好む。だから、けして外では歌うな。その行為は、ナラフアドを引き寄せる原因になる」

「ん、んなことよりもっ。あ、あいつに毒なんてないわよね？」

「ナラフアドは無毒。あの娘は、しばらく静養していれば問題ないはずだ」

「そ、そう。そ、それで？ あたしは、どうしたらいいのよ」

「オレが回復するまで、何もせず待機している。お前が歌わなければ、ナラフアドは周囲を飛び回るだけだし、誰にも姿を捉えられない」

「弱点は？ 弱点は、ないの」

「アイツの甲殻は頑丈だ。オレが使っていた、ドリュンバッセ重鋼の大剣でなら…」

青年はちらりとそのほうを見やる。

「よ、よく分かんないけど。つまり、あんたとあの大剣がセットになつたら、あんのクソ虫に勝てるのね？」

「ああ。後ひとつ、明里の歌があれば、だ」

「そ、そう」

明里は救急車が発進すると知って、急いで綾子のところへ走った。「我ながら、情けない」

青年はそうつぶやいた後、すぐに寝息を立て始めた。

綾子は病院で治療を受けて、個室で経過を見ることとなった。

明里は椅子に座り、ベッドで横になる綾子の手を握っている。

「よ、よかったね。大したことなくて」

「明里ちゃんが、クレープをおごってくれたからだよ」

「な、なんでよ」

「明里ちゃんが変わなことをしたから、それで運が回ったんだよ」

「そ、そんなことないじゃない。あたしは、綾子が言うほどドケチじゃありません」

「別にい、わたしは明里ちゃんがケチだなんて言っていないですよ」

綾子が普段通りだったので、調子に乗る明里。

「あゝあ。制服、破けちゃったよう。お気にだったのにい」

「替えがあるでしょ。こんな時に服の心配なんて。ま、綾子らしいつちやらしいけどお」

「あ。そういえばさ、あの人はどうしたのお？」

急に話を変えた綾子に、明里は溜息まじりにこう答える。

「別の病院に移されて、監視されてるみたいよ。現に、あたしらもね」

「え？ そ、そうなんだ」

明里は手を放し、椅子から立ち上がった。

携帯電話を取り出して開きながら、カーテンをめくって窓の外を見た。

「どうしたの〜?」

「お母さんからメールだよ。テレビにあたしら映ってたじゃない? それで、病院に移って……帰りどうするの? って来たから、車で迎えに来てって連絡しといたの」

「あ、そうだったんだ。わたし、傷口消毒してたから分からなかったよ〜」

「また明日、ここに来るよ。あたし」

「そ、そう。遠いから、無理しなくていいんだよ?」

「綾子がこうなったのは、あたしの責任だよ。あたしの、あたしが……悪いんだ」

「あ、明里ちゃんっ?」

「なんでもない」

首を左右に振って、明里は綾子のほうへ向き直る。

「それにしても、明里ちゃんってすっごいよね〜」

「な、何よ急に」

帰り支度を整えている明里に、綾子はこう言った。

「だってあの人、明里ちゃんが魔法使いだって言ってたじゃないあ〜い」

「は?」

「え、えっと。魔力がどうか」

「ああ、それ? どうせ、でまかせよ。きつと」

「え〜? だって、明里ちゃんが歌ってから、皆にも虫が見えるようになったんだよ〜」

「そ、そうだけどさ」

バッグを肩から提さげて、明里は再び外の景色を見る。

「お母さんの車。駐車場にあるわね。報道陣とか……まっ、とりあえず有名人扱いだし。適当にあしらって、家に帰らないと」

「ねえ、明里ちゃん。歌っちゃダメだよお?」

「ん。あれ、聞こえてたの?」

「うん。あの人、悪い人じゃないよ。あんな状態で、皆を守るため

に必死だったもん」

「そう、かもね」

「明里ちゃんだって、満更じゃないでしょ？」

「ど、どうしてよ」

「だって、出逢って早々にキスだよ？」

「わわわわっ!？」

動揺する明里を見て、綾子は満足そう。

その明里は人差し指を立てて、綾子に口止めする。

「聞き耳立ててんのがいるって言ったのに、どうしてんなこと言うのっ」

「あ、ごめえん。ナチュラルに間違えちゃった」

片目を閉じる綾子を見て、胸を撫で下ろす明里。

「じゃあ、あたしは帰るね」

「うん。気をつけてね」

「だいじょうぶよ。お母さんは、ゴールド免許だからね。あんまり運転してないけどっ」

病院から家に帰ってきた明里。

「ただいま」

そう言ってから、玄関で靴を脱いで、家にかかる日宮母。

「ふう。芸能人って、ああいうふうにマスコミに追いかけられるのねえ」

「こら、明里。まずは」

「ただいまあ」

「よろしい」

日宮母は明里が戸締まりをしたのを確認してから、キッチンのほうへ移動する。

明里は着替える前に、リビングに足を踏み入れた。

「徹。チャンネル変えなさい」

「無駄だよ。どの局も、こればつかだもん」

「だったら、テレビ消しなさい」

「やだね。姉さんに何があったのか、僕には知る権利がある。どうせタダで話す気ないんでしょ？」

「ナマ言っつてんじゃないよ。あんだ、目の前で綾子を傷つけられた……あたしの身にも、なってみなさい」

「あ、え……」

テレビには血を流して倒れている綾子の姿が、遠くから映されていた。

「ご、ごめん」

リモコンを手にして、急いでテレビを消す徹。

「明里？ 今日、明里の大好きなチキンカレーよ」

キッチンのほうから、日宮母が話しかける。

「いらない」

「そ、そう。お腹空いたらいつでも言いなさい。あ、もうお風呂は沸いているから」

「うん。ありがと」

弱々しい声で返事をし、明里は二階にある自分の部屋へと戻った。

「はあ」

ゆっくりと扉を閉める。

溜息をついて、明里は扉を背にして腰を下ろす。

「な、なんで」

急に、手足が震え始める。

「こわく、ない。こわくなんか……」

自分の身体を抱き締めて、明里は呼吸を整えた。

「び、びびってんじゃないわよ。そ、それでもあたしは、て、て、天下の日宮明里なのっ？」

声が裏返る。強がっても、その震えは一向に収まらなかった。

「ちっ、ちっ、ちっ」

舌打ちを連発しても、その恐怖は消えることはなかった。

「あ、」

頬を伝う、大粒の涙。

「な、泣いてんじゃないわよっ。こ、この軟弱者っ」
気合を入れるべく、明里は自らの頬を張る。

「う、うしっ」

ドアノブをつかんで立ち上がり、よろめきながらも明里は部屋のカーテンを閉めた。

「着替えついでに、お風呂かな」

タンスから部屋着を取り出して、それを片手に明里は自室を出ていった。

『う、うう』

公園？

な、なんで、あたしこんなところに。

『あ、れ？ 綾子』

『に、逃げて……明里ちゃん』

倒れながらも、綾子は手を伸ばして明里に逃げろと訴える。

『い、いやよ。あんたを放って、どっかに行けるわけないでしょう
が』

『あ、ありがと……あか、り、ちゃ』

屈んでその手を握ろうとした明里。

綾子の手は力尽きて、地面に落ちてしまう。

『な、なにやってんのよ。あ、あや……こっ』

その手が驚くほど冷たいことを知り、腰を抜かしてしまう明里。

『は、早く逃げるんだ』

『あ、あんたは』

明里の隣には青年が倒れていた。

『お、オレが、力不足なあまりに……』

『そ、そうよっ！ どうして、どうして……くれるのよ。あ、あ、

『あやこが……っ』

『ぬぐああああああああっ！』

隣にいた青年が、ナラフアドに蹴飛ばされた。

『あ、え……？』

青年と綾子が、ナラフアドに捕食されている。

『や、やめ……やめなさいよっ』

恐怖に震えて、声が出せず、身体も動かない。

『フシユウウ』

『え、え、あ、や、やだ、』

ふたりを平らげたナラフアドが、明里の眼前へと。

「は、はああ、はあ、はあ、な、え……？」

ベッドから飛び起きた彼女は、ここが自室であることを認識する。

「ゆ、ゆめっ？」

頬を両手で押さえて、軽くつねった。

「いひゃっ」

痛かった。

「よ、よかったあ」

左胸を手で押さえて、深呼吸する明里。

「ひ、ひっく」

怖くなって、明里は泣き出してしまった。

「や、やだよお。あ、あんなバケモノと……」

嫌な予感がして、明里は携帯電話を手に取った。

「ふ、ふう」

呼吸を整え、電話する。

コール音が三回して、相手が出た。

『もしもし？ 早い時間にどうしたの、明里ちゃん』

「よ、よかった。綾子が無事で」

『ふえ？ あれ、心配してくれてたんだ』

「あ、あつたりまえでしょ。そ、それよりっ。綾子、あなたはいつ退院できるの？」

『せ、性急だねえ。今日にも退院できるよ。あ、そうだ。明里ちゃん』

「ん〜？」

『だいじょうぶう？　なんか、いつもの明里ちゃんの元気が、伝わってこないんだけど』

「だ、だいじょぶよ」

『そう？　じゃあわたしね、退院したら明里ちゃん家に寄るから』
「へ？　な、なんでよ」

『昨日、明里ちゃんが帰った後で、お父さんとお母さんがここに来てね。ちよつとケンカしちゃったんだ』

「め、珍しいね。あんたが、両親とケンカなんて」

『うん。だって、だって、ふたりとも、もう明里ちゃんと関わるなつて言うんだよ〜？』

「それは、正解だと思うわ」

『ええ？　やっぱり、明里ちゃん変だよお』

「……………」
『普段の明里ちゃんなら、そんなの知ったこつちやないわつて言うもんっ。ぜつたい』

「……………」

『も、もしもしい？』

「なによ」

『よかった。明里ちゃん、真剣に考えてくれてるんだね』

「真剣に、なるわよ。だって、下手したら……………あんた、綾子が、死んでたか」

『もつっ。ダメだよ、そんな暗いこと言っちゃ。どんなことも、明るく元気に解決する明里ちゃんが、どうして今回のことであつじつじ悩んでるのっ？』

「うっさいわね。お金よりも、命のほうが大事なのよ」

『あれえ？ あ、明里ちゃん？』

「学校でも、友達いないあたしに……ちゃんと向き合って接してくれるあんたを、危険な目に遭わせてさ。平然としていられるはずないでしょ」

『……………』

「あの時は、ごめんなさい」

『あ、謝らなくていいよ。明里ちゃんが悪いんじゃないもん。悪いのは、あの虫さんだよ』

「ううん。あの時、綾子やあの男の言葉にしたがって動いていれば、ああはならなかった。本当は、ちゃんと面と向かって謝りたいんだけど。あたし、何せ素直じゃないからさ。顔と顔を向き合わせたら、言えないような気がして。だから、だから、電話越しでごめんね」

『明里ちゃん』

「ついさっきも、綾子とあの男が死んじやう夢を見て、急に怖くなったんだ。お金もうけや夢の成就よりも、友達が大事なんだって今更だけど、気づいちゃったのよ」

『……………』

「あたし、ガツコ休んで綾子のこと待ってるから。マスコミに見つからないように、気をつけなさいよ」

『う、うん』

明里は、一方的に電話を切った。

綾子との通話を終えて、明里は部屋着に袖を通してからリビングへとおもむく。

「おはよう」

「おはよう。遅かったな」

「えっ？」

明里は朝ご飯を食べようと自分の席に着こうとする。

が、すでにそこは青年に陣取られていた。

「あ、あんたつ。な、なんでここに？」

「姉さん。そんな言い方はないだろ。この人は、姉さんを守るために参上したんだよ」

「あんたにや聞いてないわ」

青年はチキンカレーを食べながら、真向かいにいる徹と雑談していたらしい。

「あら、明里。こおんなイケメンさんと仲良しになってたなんて、お母さん感激よう」

「やっぱ、姉さんは母さんに似たんだね」

「なんか言った？ とくろ」

「なんでもないよ」

徹はカレーを食べ終えて、自分の食器を流しへ片付ける。

新しい皿に明里の分のライスとカレーを盛りつけ、徹はテーブルにその皿とオレンジジュースが注がれたグラスを置いた。

「明里。高校から連絡があつてね。昨日の事件で、保護者から安全が保障されるの？ って電話が相次いだらしいのね。それで、この近辺の学校は全部、しばらく休校にするそうよ」

「はあ？ な、なんでそうなるのよ」

「そんなことをお母さんに言われても困るわ。それと、警察や自衛隊の方々がこの付近に集まって、昨日の虫がいつ現れてもいいように警戒してるの。近隣住民はなるべく早く避難するようになって、勧告もされてるわ」

「そ、それって……」

ちらりと、明里は青年を見た。

「案ずるな。オレは連中の目を掻い潜^かってここに来ている」

「そ、そうじゃないわよ。あんたは、もう回復したの？」

「あのような銃創^{じゆうそう}など、包帯のおかげで一日あれば治癒する。体内にあった鉛弾は、医者がていねいに取り除いてくれたからな。日本の医療技術は、それなりに進んでいて安心したよ」

「そ、それで？ あんたは、あたしの家に来てどうするつもりよ」「生憎、手元に重鋼剣ドレンベスがないのでな。すぐにナラファドとやりあうつもりはない」

「そ、そう。じゃあ、あんたひとりでやりなさいよ」

明里の発言に、日宮母と徹はびっくりする。

「そうか。オレひとりで、勝てるかどうかは解らないがやってみよう」

青年が席を立つと同時に、日宮母が明里に食ってかかった。

「ちよつと、明里っ」

「何よ、お母さん」

「この人は、明里を頼ってここに来たのよ。協力してあげなさい」

「て、手を貸させて言うの？ あたしと綾子は昨日、危ない目に…」

「お、お母さんは、あたしに死ねって言うの？」

「ち、違つわよ。明里が起きる前に、この人から話は聞いたの。明里の歌で、あの虫が見えるようになるって言うじゃない。だったら、協力してあげなさい」

「で、でも…あ、あたしが歌えばその虫が、ナラファドがあたしを目当てに飛んで来るのよね？」

ふたりのやりとりを見ていた青年は、溜息まじりにこう付け足した。

「ああ。ナラファドは魔力を好む成虫だ。特に良質な魔力を持つ者を好んで捕食する。このまま放置はできん。一刻も早く駆除しなければ、大量発生する可能性がある」

「な、なんでよ」

「アイツは虫だ。繁殖力は恐ろしい。こちらの世界でも、虫はそういうものだろう？」

明里は息を飲む。

「その口振りからすると、あんたは別世界から来たのね？」

「違つな。オレは元々、こちらの世界の人間だ。ちなみに出身はイギリス。とはいえ、母親が日本人でな」

それを聞いて、日宮母は手を叩いて微笑む。

「あらっ。だから、日本語が流暢なのね」

「うむ。まあ、いろいろあつて神隠しされたんだよ。こちらに戻るために手を尽くして、帰って来たんだが……余計なものをこちらに呼び込んでしまった」

また溜息をついて、青年は明里へと振り向いた。

「次元のほつれとか、言ってたわね」

「ああ」

「て、てかなんで、あたしの歌であのクソ虫が見えるようになるのよ？ い、意味分からないわ。説明してよ」

「こちらの世界にも、潜在的に魔力を秘めた人間は多く存在する。大抵は表に出ないで一生を終えるだろうが、明里は特別だ。明里の歌には、強い想いが込められている。それが、ナラファドにとって絶対に許せないものなんだ」

「ゆ、許せないっ？ あたしを」

「ナラファドは自身に当たる光を屈折させて、自身の姿を生物の視覚で捉えられないようにしている。しかし、明里の歌はその作用を打ち消してしまうのさ。明里の歌は、そうした特殊能力を無効化する効力があるようだ」

「す、すっげえ。姉さんに、そんな力があつたんだ」

目を輝かせる徹。

明里は伏し目がちにこう質問した。

「あんたは公園にあるあのど、ドル……えっと。あの大剣を取り戻したら、ナラファドとやりあうの？」

「ああ」

「だったら、ひとりでやってよ。あたしと綾子を、危険に巻き込まないでっ！」

大声で怒鳴り散らして、明里はリビングを出ていこうとする。

が、青年は明里の腕をつかんで、彼女を引き止めた。

「は、放してよ」

「まだ話は終わっていないぞ。オレは、明里に戦を強いるつもりはない。だから、ここでおとなしくしている。アイツはオレが何とかする」

「だ、だったら、さっさとあのクソ虫を片付けてよ」

「いいのか？ アイツで金もつけるとか言っていたが……まあ、個人的にはそのほうが好ましい。数が増えて面倒になる前に、仕留めなくては」

「そ、そうしてくれると助かるわ」

「だが、ナラファドは明里を狙っている。オレ単独ではナラファドを捕捉できないし、アイツもオレのことなど眼中にないだろう。だから数秒でいい。歌ってくれ。そうすればアイツはしばらく姿を隠せないし、この付近をうろろして隙だらけになる」

「あ、あんたねえ。あたしに、戦いを強いるつもりはないって言わなかった？」

「言ったさ。しかし、明里の歌なしではオレはただのデクの坊だ。安心してくれ。明里とその家族、友人は必ず守ると約束しよう。だから頼む。明里の歌を、聞かせてくれ」

「え」

青年がひざまずいて、明里の手を取った。

「な、何してんのよ」

「麗しの姫君との約束を果たせなかった騎士が、何の責任もなく再びチャンスをとるのは虫がよすぎるからな。どのような罰でも受ける。だから、明里の許しを請いたい」

「ひ、姫君って。あ、あたしをからかってんの？」

「そのようなつもりはないさ」

にこりと、上目使いに微笑む青年。

不覚にも、明里は胸がときめいてしまった。

「……っ」

唇を噛み締めて、明里は。

「ラ、ララララアアア」

歌声を、ほんの少しだけ披露した。

「ふむ。ありがとう」

「あ、ちよ」

青年は明里から手を放して、日宮家を飛び出していった。

「いいのかよ。姉さん」

「う、うっさいわね」

「あのイケメンさんだけじゃダメよ。明里、すぐ手伝いに行きなさい」

徹と日宮母に責められて、明里は怒りに震えた。

「ふたりして、あたしを殺したいの？」

「そ、そうじゃないわよ。明里は、あなたのために戦っているイケメンさんを助けたいと思わないの？」

「姉さんは薄情な人だったんだね。負けず嫌いで、お金にがめつくて、夢に向かって一直線だった姉さんが、あんなバケモノにやられっぱなしでいいのかよ」

「うっさいわよ！ あんたら、他人事みたいに言っただけ。あたしは、あのクソ虫に襲われて死にかけたのよ？ 綾子だって、下手すれば死んでたかもしれない。あ、あ、あんなバケモノを目の前にして……同じことが言えるわけえ!？」

明里の涙ながらの叫びに、日宮母と徹は黙り込む。

「こ、怖いんだよ。あたし、死ぬのはやだつ。夢だって、お金だつて、生きてなくちゃ意味がないでしょ？」

その場にへたばって、明里は大粒の涙をこぼす。

震える自分の身体を抱き締め、明里は泣きじゃくった。

「そんなの、明里ちゃんらしくないよ」

明里は、いつの間にか後ろに立っている綾子を見上げた。

「あ、あや、こ？」

「明里ちゃん。明里ちゃんの夢は、歌手になることでしょう？」

「あ、う、うん」

「その歌で、皆を元気づけたいんでしょう？」

「そ、そうだよ。それが、それがどうかしたの」

「だったら、明里ちゃんの歌で勇者さんを助けてあげてよ」

「ど、どうして。綾子も、あたしに死ねって言うのね」

「違うよ。この町の皆は、見えない虫さんにおびえている。でも、

あの勇者さんと明里ちゃんが一緒になれば倒せるんだ。明里ちゃんが歌うことで、結果として皆を救えるんだよ？ そうすれば皆に感謝されて、いろんなところから報奨金がもらえるかもしれない」

「な、なにいつて」

「虫さんを退治さえすれば……この国の英雄だよ？ あの虫を殺してしまっても、どこかの研究機関に標本として売れば、お金だつて稼げるもん。一石二鳥どころじゃないよ？ こおんなチャンスを見逃すなんて、明里ちゃんらしくないなあ」

ピク。明里の眉が動く。

「あ、だったらあ。あの勇者さんが倒した虫さん、わたしが所有権を持って、どこかの研究機関に売っちゃおうかなあ。あの勇者さんなら、快く権利を譲ってくれそうだし」

ピクピク。さらに動く。

「そうと決まったらあ、早くあの勇者さんのところへ」

「ちよおつと待ったああああああああああつ！」

綾子がぐるりと踵かかとを返し、玄関に向かおうとした時。

明里が、綾子の腕をつかんで絶叫した。

「いくら綾子でも、そおんな大チャンスを譲り渡す気はないわつ。アレでもつけた金は、ほとんどがあたしのものよ。ちつ。あんの男に、手柄を持ってかれてたまるもんですかあ！」

慌ただしく明里は玄関で靴を履いて、戸を開けて公園へと走っていった。

日宮母と徹は、明里をうまく操縦した綾子に拍手を送る。

「わたしのお父さんも自衛官なんで、明里ちゃんの安全は保障します。んじゃ、わたしも後を追いますので。ふたりはここでテレビを見て、待機してくださいねえ」

「は、はい」

笑顔の綾子を見送り、日宮母と徹はともに腕を組んで感心していた。

その頃、公園では。

「クツギヤアアアアツ」

ナラフアドは突き刺さっていた大剣に飛びついて、それに牙を立てていた。

「どけ」

「クツギエエエエエツ！」

青年はナラフアドを蹴飛ばして、跳びながらその柄をつかんで引っこ抜いた。

「やれやれ。ようやく、まともに戦えるな」

大剣を両手で構え、青年は周りに倒れている警察官に目を向けた。「まだ、息はあるか。魔法金属を餌と見るとはな。かなり腹を空かせてると見える」

体勢を直して突っ込んでくるナラフアドを目視し、青年は大剣を深く振り被る。

刀身の腹を右足で蹴飛ばして、全身で振り回す斬撃を合わせた。

「むん」

それはかわされてしまい、アスファルトにめり込む。

ナラフアドは近くにある樹木と時計に衝突し、それらを突き倒してから高度を上げた。

「昨日と違い、随分と冷静だな。明里の歌が、弱いからか」

倒れる樹木と時計から離れ、青年は空を見上げる。

高速飛行するナラファドの姿が、半透明になっていた。

「もう、効力が……急がねばならないな」

青年は大剣を背負うようにしてから高く跳び、両足で剣先を蹴り上げた。

空中で遠心力が働いた大剣を、両腕の力も加えて振り下ろす。

「ギイエエエエエッ！」

それはナラファドの薄羽うすはねをかすった。

「くっ。なかなか当たらん」

着地して、青年は顔をしかめた。

右腕を見ると、傷口から鮮血あざが滴る。

「治りかけだったからな。開いてしまったか」

額から流れる汗をぬぐわず、青年は空を飛ぶナラファドを見据えた。

「このままでは、埒らちが明かないな」

青年は大剣を左肩に担いで、霞かすむナラファドを目で追う。

「はあああああッ！」

青年は大剣をアスファルトに突き刺し、それをてこにして、大きな塊をくりぬいた。

「いづくぞおおおッ！」

大剣から手を放し、青年は跳ぶ。

両足で柄つかを踏み込み、アスファルトの塊を空へ打ち上げる。

「師匠、あなたが教えてくれたことだ。“ギャザー”！」

青年は空に手をかざし、対象に物体が集中する魔法を唱えた。

その塊と倒木と時計は、空を飛び回るナラファドへと一直線で向かう。

「グガアアアアアッ!？」

命中した。

ナラファドの高度が一気に落ちる。

しかし、墜落直前で体勢を直し、すぐに空へと戻った。

それらは落下し、アスファルトにめり込む。

考えていて、青年はその気配に気づかなかった。

周りには、自動小銃を携えた自衛隊が集まっている。

「何のつもりだ」

「我々は自国を守るために戦う。ただそれだけだ。貴様のような青年に全てを任せるつもりはない」

「来たぞ。撃てえ！」

青年は耳を押さえて、事の成り行きを見守った。

弾丸はナラファドの甲殻を貫通できず、弾かれてしまう。

「おとなしく下がっている。ミサイルが通じない時点でもう、退避するべきだ」

「たとえ敵^{かな}わなくても、我々は逃げずに立ち向かう。それこそが、我らの責務だ」

「見上げた根性だ。だが、ここはオレに任せる」

青年は戦闘機に構っているナラファドの気を引こうと、大剣を空に掲げた^{かか}。

そうだったな。もう少し、頭をやわらかくしないと。

不敵に笑いながら、青年はその名を口ずさむ。

「“グラビトン”」

その黒い刀身が、妖しく輝く。

刹那^{せつな}、その大剣の周囲に何かが集まる。

「な、なんだそれは」

「先刻、お前達が放った金属片だ。ミサイルに弾丸、そうしたものはバラまくと人にケガをさせるからな。それに、こうすれば」

ナラファドが、よだれを垂らしながら青年へと迫る。

そう。魔法で引き寄せられないのなら、その臭いで誘い込めばいい。

「このように、アイツを呼び寄せる餌にもなるわけだ」

大剣を深く振り被ろうとした時、右腕に激痛が走った。

青年は歯を強く食い縛る。

「まだ、本調子ではないか」

青年は重力を帯びた大剣を前に構えて、右足で剣先の腹を押さえながら、ナラファドの体当たりを防御する。

その衝撃で後退するも、左足だけでどうにか踏ん張った。

「ちよつと、何やってんのよ!」

「お、お前は……」

遠くから、明里の声が出た。

青年はそれに驚き、目を疑ってしまう。

「せつかくあたしがここに来てさ、歌ってやったのに。さっさとどめ刺しなさいよ!」

「明里。お前、家でおとなしくしているんじゃないのだったのか」

「うっさいわね! ちよ、ちよつとどきなさいよ」

明里は自衛官を振りきり、青年に駆け寄った。

頬赤らめながら、明里はその手を優しく握る。

「血だらけだぞ。右手に触るな」

「何よ、文句ある?」

「いいや」

「それに、まだ……あたしは、あなたの名前を聞いてないから」

「オレの名前か。アイツを倒したら、教えてやるっ」

ふたりして、空を飛び回るナラファドを見据えた。

「ふん。それに、あんたからはまだ、慰謝料もらってないしね」

「明里。柄を握れ」

「え?」

「早く!」

明里は大剣の柄を両手でつかみ、それから「ラララララアアア

」と歌った。

「片手が開いた。いけるぞ。“アイソレイト”おっ!」

今の歌で感情的になったナラファドが、正面から迫ってきた。

興奮を抑えられない青年は震える右手から、黒い球体を発現させる。

その分散魔法を、刀身に集中する重力へと込めた。それは激流と

らしい。

頬をふくらませて、そっぽ向いている。

「あ、それと。そいつバラすなんてダメだかんね！」

「なに？ さては、こいつを標本扱いで、どこかの機関にでも売り飛ばす気だろう？」

「ギクツ」

「解りやすい娘だ。だからこそ、この腕で守りたくなる」

「へっ？ い、今……あんだ、何て言ったの」

青年の告白に、明里は戸惑ってしまう。

あ、あれっ？ あたし、なんでこんなにドキドキしてるのっ？

戦の余韻で昂^{いん}つていた鼓動を、少女は恋だと勘違いした。

そのひとつひとつが本当かどうか確かめたくて、明里は左胸に両手を重ねる。

「話は後だ」

青年は大剣を手の平から生み出した黒い球体に吸い込ませる。

じっくりとナラフアドを観察していたが、青年は溜息をついて、

明里へと手を差し伸べた。

「まさか、ふたりに先を越されるとはな」

「ん？ あ、あれ？ お父さんっ」

明里の背後には、重装備をした自衛官が立っていた。

「何て危険な真似をするんだ、明里。と言いたいところだが、今回はふたりの活躍なしではあの虫は倒せなかった。礼を言う」

日宮父は、ふたりに深々と頭を下げる。

「いや、いいんだ。こちらも、娘さんを危険な目に遭わせてしまった。それは詫びなければならぬ」

青年も、深々と頭を下げた。

「むう。なかなかできた、いい男だ。あんなでかいものを振り回す腕力もあるし、ていねいで謙虚な紳士ときた。うむ。明里、この男との婚約を許可しよう」

「はあ？ ちょ、お、お父さんっ？ 何をトチ狂ってるの？」

父親にからかわれて、明里は顔を真っ赤にする。

初恋に恥じらう少女は、うつむいて唇を噛み締めた。

「む？ そのバツジは……？ 周りにいる自衛官の指揮を執っていたのは、あなただったのか」

「ほう？ 君は、なかなか洞察力に優れるようだ」

「でなければ、こんな虫のバケモノを相手にすることなどできませんよ」

「はっはははははは」

笑い合う青年と日宮父。

「て、てか、お父さん。左頬が腫れてない？」

明里は顔を上げながら、そう指摘した。

「いいところに気がついたな」

日宮父が明里と話していると、後ろから声が聞こえた。

「あ、明里ちゃん」

「え？ あ、綾子」

綾子を案内してきたのは、ひとりの自衛官。

「おや、噂をすれば何とやら、だ。高崎上等兵」

「あ、紹介するね。こちらが、わたしのお父さん」

日宮父と綾子は笑顔で、隣に立つ男性を紹介する。

「む。ひ、日宮曹長。その……」

「なんだ？ 高崎上等兵。口ごもって、どうしたんだ」

バツが悪そうに、高崎父は日宮父に質問した。

「い、いえ。あの虫はどうするのですか？ そちらの青年もそうですか……」

「あの虫は基地に運んで、専門家を呼んで調べるしかないだろう。」

アレを運ぶトラックの手配は済んだのか？

「先程連絡いたしました。十分後に到着するそうです」

「手際がいいな。そうでなくては」

「い、いえ」

日宮父を前にして、恐縮している高崎父。

専門家なら、自分が　と。青年は声に出そうとしたが、止めた。「だ、ダメよつ。あのクソ虫は、あたしが所有権を持つてるんだから。調べるんだつたら、それなりのお金を用意してくれないと」「確かに、ふたりの功績が大きい。戦闘機を飛ばして、ミサイルを直撃させたのに死なない。私達も銃で応戦したが、どれも手応えがない。唯一有効ゆいじつだったのは、そちらの青年が持つでかい剣だけだった。まあ、この戦闘は何ヶ所から撮影しているからな。ごまかしは通じん。後で何かしらの褒美が出るだろう」「え、ま、マジでっ？」

日宮父の発言に、明里は飛び起きる。

「明里。今朝のニュースを見てなかったのか？　国は非常事態だと宣言して、この付近を特別戦闘区域に指定したんだ。付近住民には避難勧告も出ている」

「お、お母さんから軽くは聞いたよ」

「そうか。今回撮影した映像と、その虫の死体は、今後新たな魔物が出て来た時のために資料として分析、解析するんだ。その材料をくれたふたりには、報奨金を出すように私が上に交渉しよう」

「ほ、ほんとう？」

お金の話を聞いて、目を輝かせる明里。

一方、青年はあることに違和感を覚えずにはいられなかった。

「奇妙だな。昨日、オレは重罪人扱いされて、警察のほうに手厚く監禁されていたんだが。そんなオレにも金を出すのか？」

「それは銃刀法違反だ。あんなでかい大剣を持っていたら、真っ先にそれを適用して、身柄を確保するのが普通だろう？」

「ああ。確か、そんな法令だと聞かされたな。んで、オレの周りに自衛官を配置させているのはどういう意図だ」

日宮父が報奨金の話を持ち出した時から、自衛官が三人を静かに取り囲んでいた。

「うむ。こちらとしては手荒な真似はしたくない。おとなしく、三人は基地まで来てくれないか」

日宮父が低い声で言うと。

「え？」

「ちよ」

「……………」

綾子、明里は目を見開いた。

金銭の話で注意を引きつけ、三人を逃がさないように。

後ろ手に合図を出していたな。

青年は、眼前にいる日宮父が相当な切れ者であることを知って、
口元を歪ませる。

「それは別に構わない。ただ、そちらの女性ふたりには……………」
「でも、あなた方は親だからな。まあ、立場が危ういのはオレくらい
だな」

「そう受け取られるか。まあ、本当のことを言えば……………青年がどこ
から来たのかと、どうしてあのような大剣を所持しているのかと、
あの虫が何だったのかと」

「端的に言うなら、オレを尋問じんもんにかけたいんだな」

「その通りだ」

にらみ合う、日宮父と青年。

腕を組んでから、青年は顔をしかめる。痛みを忘れていたらしい。
「オレとしても、日本の自衛隊とやりあうつもりはない。母親が日
本人なんでな。ナラファドと交戦するまでは、いろいろなところを
観光して、日本文化に触れてきた。オレの母さんが、日本はいいと
ころだと楽しそうに言っていたからな。実際に来て見て、そうだと
納得できたよ」

腕をほどこいて、青年はまばたきを繰り返す。

「母親が、日本人？ ほほう」

「なんだ？ それがどうした」

「いいや。抵抗する素振りを見せないからな。そういうことだった
のか、と」

「抗あひかうつもりはないさ。ふたりの父親を相手に、争あひかうつもりはない。

オレは、明里なしでは戦えないデクの坊だ。明里を悲しませるような真似はしない」

「できた男だ。私としては、本気で明里と婚約を交わしてもらいたい」

「後は、そちらの本人次第だな」

肩をすくめて、青年は明里を見た。

「へっ？ あ、あたし？」

自分を指差して、明里は首を横に振る。

「おや。君は明里に夢中なのか」

「ナラフアドに勝てたのは、明里の力があってこそだ。彼女の存在なしでは、オレは今頃ナラフアドの餌になっていただろう。その恩義は、一生かけて返すつもりだ」

「な、何言ってるのよ。あんたは人前でっ」

勝手に話を進められて、明里はうれしくなる。

「はっはははは。照れているのか、明里」

「お父さんっ。公然とあたしをからかわないで」

現実を思い出し、明里は暗い表情になる。

そんな明里に寄り添って、綾子は父親の顔を見上げた。

「何も、しないよねえ？」

「お前達、三人の安全は保障する。さあ、車に乗ってくれ。あまり乗り心地はよろしくないが……つべこべ言ってもらえん。マスクミに嗅ぎつけられる前に、ここを退避せねば」

日宮父が代わりに答えた。

「よし。皆は、あの虫の死骸しかいをていねいに運ぶんだぞ。いいな」

一際大きなトラックが、現場に到着した。

「いえっさー！」

日宮父の指示に、自衛官達は元気よく答える。

「ん？」

「どうした。その青年」

「な、待てっ！ ナラフアドから離れてくれ」

青年が動く、周りの自衛官が身構える。
歯を食い縛って、青年はじつと我慢した。

「止める。今この男を敵に回しても、私達が全滅するだけだ。そこをどいてやれ。何があったのか気になる」

青年は、ナラファドの死骸を見て確信した。

「やはり、遅かったか」

「何が遅いと言っただね？」

「ナラファドは、産卵を終えている」

「な、なんだと？」

「アイツの下半身。尻尾があるだろう。そこに卵がたくわえられているんだ。だが、そこに卵らしきものがない。この近くに産みつけたのかもしれない」

「そ、その卵は何日で孵化するんだ？ それと、そいつが産卵しそうなところはどこだ？」

「ナラファドは高所にある森林を好む。それに卵は樹木の幹をほじくって中に植えつける。幼虫が産まれるのは、遅くても十日。早くても五日だ」

「だったら、見つけ出して潰すまでだな」

「いや、ナラファドと同様に卵は半透明だ。見つけ出すには、明里の歌が必要になる」

皆は一斉に明里を見た。

「え、ええっ？」

「昨日産卵を終えたとなると、猶予はもう最短で四日しかない。ナラファドの幼虫は、イモ虫で地中に潜る。樹木と大地から養分とマナを吸い尽くして、蛹になるんだ。その前にどうにかしなくてはならない」

イモ虫と聞いて、明里は身震いした。

無意識に青年の左手を握ってしまい、明里はハツとなる。

「その幼虫だが、私達が使う銃器は有効なのか？」

青年はその手を逃すまいと、手を握り返した。

にこりと笑みを浮かべる青年。

明里ははにかんで、そっぽ向いた。

「名も知らぬ男に、全てを委ねるのは無理な話か」
溜息をついて、青年は意を決した。

「明里。聞いてくれ」

「な、なによ」

「オレは一生をかけて、あなたを守ることを誓う。オレの真の名前は」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6305s/>

何よ、文句ある？

2011年8月11日03時26分発行